

首都圏直下型地震と同じですからね。片岡町長には、そのあたりの自覚がないようです」と高木さんが振り返る。その数日後、寿都町内のコンビニで、のちに「町民の会」の共同代表になる美容師の三木信香さんから声を掛けられた。「応募検討に対して何かしたいけれど、どうしたらいいの？」と涙声の相談。署名運動に取り組みことを提案する一方、誕生した「町民の会」には準会員として関わるようになった。

高木さんは、こんなふうに隣町の動きを見つめてきた。「寿都にも町づくりの総合計画があるのに、文献調査の問題が突然出てきた感じがする。これまで、数十億円もの国からの交付金を町の予算に組み入れることができる、という話ではなかったはず。それだけに、不安に思う寿都の人たちの気持ちは分かるし、(片岡町長のやり方に)腹を据えかねる感じになってきたのではな

い。会員たちは、核ゴミ問題に絞り込み、いろんな人たちと付き合っている感じがしますね」

黒松内町議会は今年3月、核のゴミ持ち込み拒否条例を可決している。商店街を歩いてみると「心から反対」という人が半数はいる。その一方で『お金が入れば』『事業が始まったら、人の動きや物流も活発になる』と計算している人もいました。

町を歩くと、核のゴミに対する反発に匹敵するほど、「片岡町長の独断的なやり方が許せない」との空気が強い——と田原さんは話す。

最近、「町民の会」を退会した。10月の町長選など政治的な動きに距離を置こうとする、運営のあり方に納得できなかったようだ。

「核ゴミ問題は自分たちの心の叫び、生命と暮らし、民主主義を守る闘い——と、わたしは言い続けてき

ました。しかし、会の身内だけで盛り上がり、チラシを出しても次の行動がない。具体的な提案をしても拒否され、悩んだ末、ひとりだけでやることをしていこうと考えたんです」

Uターン移住から4カ月、周囲の人たちには少しずつ経験を積み、社会に対する見方を鍛え、成長してほしいと願う田原さん。自らの信念を曲げず、地道な取り組みが続く。

「自然学校」を創った先駆者が寿都湾の豊かな可能性を説く

ブナの北限の地として知られる黒松内町の作開地区は、寿都とのつながりが強い。昔は、ニシン漁で働く人たちの食料庫の役割を担い、作った野菜を供給したこともある。同じ行政区だったことから今も寿都で暮らす親戚がいたり、お寺の檀家になっ

ていたという。

黒松内の市街地に向かう農村地帯の一角に、廃校になった小学校を利用した「黒松内ぶなの森自然学校」がある。自然学校やキャンプ、人材養成に向けた大人の自然講座などを道内各地で展開している、「NPO法人ねおす」の活動拠点のひとつ。元教員住宅で暮らす代表の高木晴光さん

「そうしたことができない自然学校を実現させるために、寿都の人たちと一緒に将来の町づくりを考え、サポート役をしていきたい」と高木さんが力を込めた。

自然学校の構想を実現させるには、処分地選定に向けた事前調査に頼ろうとする意識を、行政や住民がどう克服できるにかかっている。

※

10月26日投票の寿都町長選は、核ゴミ問題に対する住民意識を問う、今後の展開を示唆することになる。文献調査を推進して原子力政策に一石を投じた現職の片岡春雄氏が6選をめざし、対抗馬の前町議・越前谷由樹氏は「調査の撤回を国に求める」を公約に掲げた。片岡陣営は9月5日に後援会の事務所開きを行ない、20年間の実績をアピールしている。越前谷陣営は、挨拶まわりなどを通して浸透を図るが、「沈黙の選挙選の色彩が強く、自分の色を出さない町民も多い」(後援会長の吉野寿彦さん)という。

※次ページ以降、片岡町長インタビューを掲載する。やり取りは1時間半におよんだが、誌面の制約からその一端を要約して紹介した。

「100軒訪ねても、実際に会えるのは20軒ほど。わたしの肌感覚では、会った人の7割近くが核ゴミに反対意見を持っていた。賛成の人は25%くらいじゃないかな。水産加工業の人も一枚岩ではないし、



今年5月にUターン移住。家庭訪問を通して核ゴミ問題に対する思いを訴える田原誠さん

「核ゴミ問題は自分たちの心の叫び、生命と暮らし、民主主義を守る闘い——と、わたしは言い続けてき

ました。しかし、会の身内だけで盛り上がり、チラシを出しても次の行動がない。具体的な提案をしても拒否され、悩んだ末、ひとりだけでやることをしていこうと考えたんです」

Uターン移住から4カ月、周囲の人たちには少しずつ経験を積み、社会に対する見方を鍛え、成長してほしいと願う田原さん。自らの信念を曲げず、地道な取り組みが続く。

「自然学校」を創った先駆者が寿都湾の豊かな可能性を説く

ブナの北限の地として知られる黒松内町の作開地区は、寿都とのつながりが強い。昔は、ニシン漁で働く人たちの食料庫の役割を担い、作った野菜を供給したこともある。同じ行政区だったことから今も寿都で暮らす親戚がいたり、お寺の檀家になっ

ていたという。

黒松内の市街地に向かう農村地帯の一角に、廃校になった小学校を利用した「黒松内ぶなの森自然学校」がある。自然学校やキャンプ、人材養成に向けた大人の自然講座などを道内各地で展開している、「NPO法人ねおす」の活動拠点のひとつ。元教員住宅で暮らす代表の高木晴光さん

「そうしたことができない自然学校を実現させるために、寿都の人たちと一緒に将来の町づくりを考え、サポート役をしていきたい」と高木さんが力を込めた。

自然学校の構想を実現させるには、処分地選定に向けた事前調査に頼ろうとする意識を、行政や住民がどう克服できるにかかっている。

※

10月26日投票の寿都町長選は、核ゴミ問題に対する住民意識を問う、今後の展開を示唆することになる。文献調査を推進して原子力政策に一石を投じた現職の片岡春雄氏が6選をめざし、対抗馬の前町議・越前谷由樹氏は「調査の撤回を国に求める」を公約に掲げた。片岡陣営は9月5日に後援会の事務所開きを行ない、20年間の実績をアピールしている。越前谷陣営は、挨拶まわりなどを通して浸透を図るが、「沈黙の選挙選の色彩が強く、自分の色を出さない町民も多い」(後援会長の吉野寿彦さん)という。

※次ページ以降、片岡町長インタビューを掲載する。やり取りは1時間半におよんだが、誌面の制約からその一端を要約して紹介した。



「道の駅」の駐車場に展示されている昔のニシン漁の船。往時の日本海側の港はにぎわいを見せた

自らの「肌感覚」をもとに国策に応えた寿都町長・片岡春雄氏に訊く

「文献調査」で原子力政策に一石 コロナ禍の下で産業振興を図る

財政危機を克服してきた20年
「町民を分断するのは反対派」

——立派な公共施設も整備され、
寿都は頑張っている印象を受けます。
片岡 就任当時、先代の町長が借
金をして文化センターやプール、温
泉などを造っていました。小泉内閣

による三位一体改革のころで、地方
交付税の減額が響いて職員の給料や
町の借金を払えず、5年間の約束で
職員給与の削減に協力してもらった。
赤字を抱える町立病院の道立移管な
ども取り組んで息をつなぎ、F I
T法(固定価格買い取り制度)により
風力発電の利益が3倍になりました。



(かたおか・はるお)1949年、旭川市生まれ。71
年に専修大学商学部を卒業後、首都圏の民間会社
で働く。75年、寿都町役場に採用され、農政課
長や保健衛生課長などを歴任。2001年11月の寿
都町長選に出馬して初当選。無風選挙が続き、現
在5期目。道立寿都病院の町立移管や全国初の町
営の風力発電を推進した。子どもは独立し、妻の
久美子さんと暮らす。第二の故郷・寿都に骨を埋
めるつもりで公務に携わってきた

発電開始から16年、来年から完全黒
字化します。

寿都は町の面積が狭く、地方交付
税の基本額が少ないので、財政を先
読みしないと大変な状態になりま
す。風力で3億5千万円、ふるさと
納税で4〜5億円の歳入があります
が、今後は風力の買い取り価格が下
がる。ふるさと納税もいつまで続く
か分からないし、5年後には一番お
金のかかる、3町村で運営する清掃
センターの改修もしなければなりま
せん。

——寿都町の基金残高は？

片岡 わたしのスタートラインは
2億円程度でしたが、今は核の交付
金を入れないで16億円ほどあります。
——公共施設が整備され、基金も
あって、いい町じゃないですか。

片岡 町外の人にはそう評価され

ますが、町民は当たり前と受け止め
ている。この20年間でまともに給料
をもらったのは5年しかありません
が、先日の「子どもたちに核のゴミ
のない寿都を！」町民の会のチラシ
には「後志管内で二番目に給料が高
い」とあった。核の問題で、反対派
は大きな声を上げ、わたしを陥れよ
うとしています。ひどすぎませんか。

「50数億円の一般会計予算は高すぎ
る」とも書かれています。後志管
内の平均は40億円前後。海岸沿いの
町は面積が狭く、地方交付税が少な
く貧しいのです。漁業に対する補助
金も少なく、魚が採れないと農業地
帯との格差が広がる。ふるさと納税
や医療、風車の歳入の一部を差し引
くと、一般会計は30数億円。「50億円
は高い」は、財政の分からない人が
書いているからです。

——他は良い中身ですが、ここは
少し書きすぎと感じました。

片岡 断片的な話を聞いて書いて
いるのは札幌の人ですよ。「分断を起
こしているのはあなたたちでしょ」
と言いたい。説明会を開いても話を
聞かず、わめて帰ってしまう町民
もいる。反対派の声が広がっていた
ら、とっくにわたしはリコールされ

ています。(町民を)分断しているの
は彼らなんです。

先送りした国の責任は大きく
真面目に調査し判断すべきだ

——なぜ、嫌われる核のゴミの調
査に手を上げたのか疑問です。

片岡 高知県東洋町のことを含め、
手を挙げるとポコポコにされた歴史
があります。嫌われ物にしている
のでしょうか。一昨年の勉強会の時、
「広域的に洋上風力をやり、どうエ
ネルギーと産業を結びつけるか」を
話し合っ中、東洋町の話も聞いた。
最初はスルーしていましたが、新型
コロナの問題が起き、田舎はずぐに
影響を受けます。(事前調査に)手を
挙げることにして、わたしは後身
に道を譲れないのです。

——欧米と地質条件が全く違うの
で、僕らは日本では地層処分は難しい
と考えます。寿都町が火中の栗を拾
わなくても良かったのでは。

片岡 一番悪いのは国なんです。よ
50年間も原発を動かして(核のゴミ)対
策を(これまで)先送りしてきた責任
は大きい。ここにもメスを入れなけ
れば駄目です。最終的に(処分を)諸
外国にお願いするにしても、しっか



町営の風力発電からは年間3.5億円の歳入がある

り調査して不適地を削っていく、「日
本には安全なところはありません」
というのが当たり前。わたしは、「早
めに全国で調査に手を挙げ、皆で同
じ気持ちになり、真面目に調査をし
よう」と言っています。

——若いころに寿都で地質調査を
した、北海道教育大名教授の岡村
聡さんは、「300メートル以深に処
分場を造れる地質が広がる地域では
ない」と指摘されています。

片岡 そこまで豪語するのならば、
関連資料を全部出してください。そ
うした見方も否定しませんが、学者
の人たちにとってもNUMOの調査
は有効でしょ、と言いたい。

——郷土の自然環境を考え、町が
調査することも出来るのでは。

核のゴミ問題は争点にせず
水産・商工業のサポートを

——説明会の中で、「概要調査前に
やめられる」と言われましたが。

片岡 町民が学んだ中で、住民投
票で「やっぱり止めよう」という人が
多ければ従います。

——「肌感覚では文献調査を受け
入れる町民が多い」との発言をして、
「肌感覚がクローズアップされた。」

片岡 当初の肌感覚よりは、不安
な人が増えたように思う。町議会
だって、最初に反対したのは共産党
議員だけで、「調査は悪い話でない」
という雰囲気だったのです。新聞に
出てから、いろいろな立場の町民が
反対し、「考えを変えなければ……」と
いう議員も出てきました。最終的に
は賛成5対反対4です。

——近隣で拒否条例を制定した自
治体もありますか。

片岡 「申し訳ないな」という気持
ちもあります。反対住民の声が膨ら

むと条例制定の動きになりますが、
フラットな人は声を挙げません。否
決されると町が二分され別の問題も
起きるので、大人の対応をしていた
だいたのかな、と受け止めています。

——核のゴミ問題を町長選の争点
にする気はないそうですが。

片岡 コロナ禍で漁業が一番影響
を受け、加工屋さんもボディプロ
で効いている。そこに手を打たず、
「核のゴミがどうの……」と言う時じ
ゃない。理想論だけで飯が食えるの
なら誰も苦労しません。企業ともタイ
アップしてナマコの安定供給をはじ
め、ウニやホタテ、カキの養殖を支
援していきます。

——島牧村が脱退し、洋上風力発
電構想の足並みが揃わないのでは。

片岡 それは関係ありません。
残った6町村と3漁協で調査を始め、
皆さんと協力してやっていきます。
——20年ぶりの町長選でもあり、
公開討論会などの場が必要では。

片岡 わたしの後援会の皆さんも
それを希望しています。町民に対す
る我々の最低限の努めであり、(陣営
内では)「9月半ばごろがいい」とい
う話が出ています。

(8月24日、寿都町役場で収録)

※筆者のHP「滝川康治の見聞録」<https://takikawa-essay.com/> に本シリーズの過去記事を収録しています。ご参照ください。